



医学をうたうひと 第4回

## 精神の闇は分子によって明かされる。

澤 明

ジョンズ・ホプキンス大学医学部  
精神医学部門、神経科学部門助教授

精神疾患は稀な病気ではない。例えば統合失調症(旧称…精神分裂病)は人口の1%が発症し、社会復帰が困難なことから日本の病院の総ベッド数の10%以上がその患者で占められている。妄想や幻覚などを伴うこの疾患は、奇妙な心の病、と捉えられがちだ。もちろん正しい理解ではない。「精神疾患は脳の機能障害ですから、奇妙でもなんでもなくて、数ある病気のひとつと考えられるべきなんです」

澤明助教授は、こうした誤解や偏見を払拭すべく研究に取り組んでいる。客観的な医学の言葉で、精神疾患のメカニズムを解き明かし、この分野の本質に迫ろうとしている。「これまでの医学の共通語は病理でした。病理とは解剖すれば見つかる器質の変化、つまり血管が細くなった結果、心筋梗塞が起こる、といった病気の原因や過程を表わす変化のことなんです。精神疾患はその変化が見えにくいんです。要するに、病態を語る言葉さえなかった精神医学は、医学でありながら、医学化には遠い分野でもあったんですよ」

しかし、医学は今、新しい言語を獲得した。ヒトゲノム計画がもたらした遺伝子情報である。病理では解明の糸口すら見出せなかった精神疾患が、分子というボキャブラリーを得て、医学化への可能性を手に入れた。事実、統合失調症との関わりが考えられる複数の遺伝子も見つかった。なかでも、スコットランドの精神疾患多発家系から発見さ

れたDISC1は、有力な候補遺伝子だ。

「ある遺伝子が悪いと病気になる、という表層的な対応関係だけでは意味がありません。その遺伝子の特定部分の異常と発症が繋がって初めて、メカニズムがわかり、効果的な薬も生まれるわけです。DISC1はそんな可能性秘めた遺伝子です。かつてRasという遺伝子とそのガン特異的变化が、ガン研究を大きく飛躍させたんですが、DISC1は統合失調症におけるRasになりえるのではと研究を進めています。もちろん他の候補遺伝子や環境因子との関連も含めて、多角的なアプローチをにつけています」

八年前、澤明助教授は東大病院精神科で臨床医をしていた。多くの患者や家族の苦悩に向き合いながら、精神疾患の科学的究明は困難だという当時の医学界の認識に、失望と疑問を抱いていた。同時にゲノム解析がこの分野を医学へと進化させる突破口になる、という確信に似た予感があった。「そんな私に、当時東大病院長だった精神科科長の松下正明教授が、君はアメリカでベスタの大病院で採まれてくるのもいいね、とジョンズ・ホプキンス大学に送り出して下さったんです。それが今の私の出発点になったんですよ」

澤明助教授の言葉と行動は、精神医学が抱える課題と進むべき道を示している。明確な希望が見えている人なのだろう。精神疾患を覆う闇に、光が灯されようとしている。